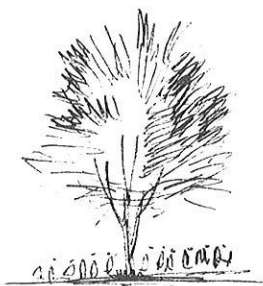


光の子



No.75 1997. 12. 25.

● 希望に満たされて（ローマの信徒への手紙第15章13節）



きつと来てね

え・中島英子

クリスマスの祝福を

お祈りいたします

社会福祉法人 光の子どもの家

「光」

大利根の枯れよりあがる熱気球

きらめきて野の空広し聖夜来る

ひさかたの光つもりて雪つのもる

鳴りわたる鈴より櫛のとび出せり

実南天疲れを知らぬ天の紺

歳晩の子どもの家の光かな

定年や十字架を負ふ初明り

落合 水尾（「浮野」主宰）

まことの喜び

マタイによる福音書 5・11～12節

わたしのためにののしられ、迫害され、
身に覚えのないことであらゆる悪口を浴びせられるとき、あなたがたは幸いである。
喜びなさい。大いに喜びなさい。天には大きな報いがある。
あなたがたよりも前の予言者たちも、同じように迫害されたのである。

理事長 福島 勲

イエスの生涯、その苦難と十字架の出来事を、われわれは神の子の定められた道として、ドラマチックに図式化し観念的に眺めている。生身の人間の苦悩とか痛みとして受けとめかねている。口で言い、文章でもそうは書くが、実感を伴う受けとめ方は出来ていない。いや出来ないのである。殉教者たちの死についても同様である。子ども共に磔刑に処せられ、泣き叫ぶ子に、天を仰ぎなさい神様のみ許に行くんだと、自分も煙にむせびながら励ます母親の心境など、長崎あたりの殉教史を読んで、いたく心打たれる思いはするが、さればとて、この母親の心情などどれほどまでに真実に理解できようか。信仰するということは、神の守り導きにより、平安と祝福に満たされ客観的にも主観的にも、外観も内面も豊かで幸せであると、独りきめし満ち満ちた祝福の中の喜びを願望する。

いわれる。(マタイ・五・十二) 日の当たる有の世界での喜びではなく日陰の裏の無の世界の状況の中の喜びである。悪をなした報いの苦難ではなく、善をなした報いの苦難でもある。計算の合わない、またこの次元の段差ある現実を、埋めようにも人知にはその手段がない。平衡を保とうにも人に情はない。挽回しようにも適応できる意志がない。ジュリアン・グリーンのアシジの聖フランチェスコ(原田武役)の中で驚くべき記事に遭遇する。苦境の中の喜びを知らされる。真実な喜びとは、打ちひしがれた人間のあるゆる力や誉れや、働きの底にある神との結びつきの極限の喜びであることを知らされる。フランチェスコは弟子(兄弟)のレオーネに語りかける。「たとえ病める人を癒し、死者をよみがえらせたとしても、そこには完全な喜びはない。」

門番は彼らを風来坊と思いを違いで、固く門を閉じて入れてくれなかった。空腹と寒さにおぼえ、凍え死にそうになつて門の外に佇む。が、一言も愚痴をこぼさず、門番を呪うでもなく、この様な仕打ちを神がなさるのだと受けとめ考える。「兄弟レオーネよ、ここに完全な喜びがあるのだよ」とフランチェスコは弟子をさとするのである。キリストへの道は狭く、これを見出す者は少ない。時代が移り進み、人の価値も移り変わる。喜びとは何か、幸福とは何ぞ。宗教の意義や価値を問うて、人はも早その価値を認めようとしなない。原始教会、中世の時代、近世、現代ともその考え方が違うのだと人はいう。も早、古い宗教、いや新しくても宗教は通じないと考える。それでもあなたは、今、完全な喜び、生きることの意義と存在の価値ですかと問いたい。苦難と誘惑の多い人生、そして悔いのみまつわりつく心の痛みを、どこで癒し、安らぎを得ると言うのか。



学者もどきのつづやき ③ 七泊八日の旅

山形大学医学部教授

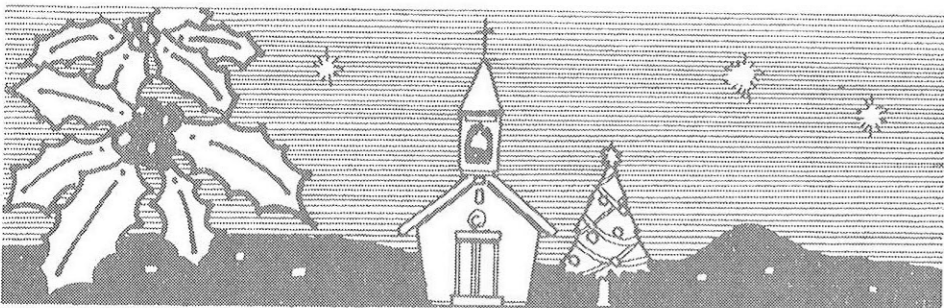
仙道 富士郎

T主将は嗚咽をこらえようとしたが、かなわなかった。「僕がオーダーを間違えたから・・・」、あとは言葉にならなかった。小生が顧問をしている山形大学医学部柔道部が、東日本医学生体育大会(東医体)柔道団体戦決勝戦で自治医大に敗れた直後の円陣である。なんとも言えない沈黙が流れた。小生以外にこの場を救う者はいないと瞬時に思った。「王道を歩いて負けたのだからいいのだ。」否、本当にそうなのだと考えた。不動の副将、大将で戦って敗れたのだからなんとも言えないのだ。東医体に初めて泊まり掛りて応援に出かけたときの話である。

た柔道部諸君の「青春性」に触れ、本当に感動してしまった次第である。先日、教室で学位をとった医師の結婚披露宴に招かれ、祝辞のなかで、「声なき円陣」の話をして、青春性の大事なことについて触れた。米倉斉加年という役者でもあり、童画家でもある人がいる。「今六十才を越え、終章の時をどう過ごそうと考えあぐねるが、自分の序章を繰り返す以外にはないのではないか」とテレビの番組で言っているの聞いたが、まさに青春性を持ち続けることの大切さを語っているものである。わたしにとっては嬉しいひとときではあった。旅は宇都宮での柔道の応援を初日として延々、七泊八日も続いた。つぎの日からは五日間、学会と東大医学研究所での熱帯医学研修コースの講義のために東京泊りで、定宿にしている、床はきしむが、従業員は皆親切な九段のFホテルに逗留した。嬉しいことつぎにはあまり面白くないこともあるのが世のならないようである。バイキングスタイルの朝食でのことである。このホテルの朝食は値段の割には結構おいしくて朝の楽しみの一つなのだが、小生がトースター

で焼いたパンが飛び出してきたのを、横にいた小学生とおぼしき子どもがヒョイと取っていきこうとしたのである。驚いて「それはおじさんのだよ」と言うと、「アツ、そうですか、すみません」と悪びれた様子もなくその場を離れて行ってしまった。皆さんならこの状況をどう判断されますか?小生は、他人がセツトしたものを横取りするなだけじゃからんと思った。後でこの話を愚妻にしてみたところ、それは悪気があつたのではなくて、ただパンがボンと出てきたから、なにも考えずにヒョイとつまみあげようとしたのだろうと言う。小生の心がねじ曲がっているのだと言わんばかりである。確かにそうかもしれない。それにしても、あの子は誰が彼のためにセツトしたと思つたのだろうか。要するに、彼らは自分が好きな物は好きな時に手にすることが出来るような環境で育ってきたから、誰が何のためにあることをしているのかなどどうでもいい、自分には関係のないことなのかもしれない。いずれにしても、こんな小さなことに拘泥している自分に対する憤懣も含めてなんだかまだにいいまいましいのである。最後の一泊は、羽田から熊本まで飛んで、安蘇山にあるホテルに泊まつ

て、シンポジウムで講演をした。おむね好評で、なんだかまたまた楽しい気持ちになつて家路につくことが出来た。それにしても、六十歳の身には宿を変えての一週間の旅は少しこたえた。



2つの文化に生きる 9

日本キリスト教団東大宮教会
バーガー 京子

胸を張って礼拝堂を歩き、その贈り物を捧げた。それ以来、メキシコではポインセチアのことを「聖夜の花」と呼んでいる。

この伝説を聞いてからポインセチアをみてみると、なるほどと思わせる。一見、何でも草の様な植物だが、その鮮やかな深紅色の葉先がすべてを整え、聖なる花としている。まさに神様が創られた奇跡の花と言えるだろう。

私は一年の中で一番、クリスマスが好きだ。それはことポインセチアの奇跡のように神の子イエスキリストがお生まれになった、まさにその奇跡をお祝いする喜びの時であり、それによって「与える」業も、このメキシコの農家の少女のように、「自分なりの精一杯の捧げもの」で充分なのである。聖書のコリントの信徒への手紙の中に「神は喜んで与える人を愛して下さる。」と書かれている。これを英語訳聖書でみると、[GOD LOVES A CHEERFUL GIVER]である。

「与える」ことによって、与える人が疲れて乏しくなるのではなく、与えることによって、かえって豊かになっていくことが本当の「与える業」なのだと思う。

アメリカでクリスマスをお過ごし

たことがあるだろうか。クリスマスはアメリカが一番輝く時だと私は思う。何が輝いているかといえば、イルミネーションである。日本の原宿等で見ると華やかさとは違って一軒一軒がその家なりの飾り付けを楽しんでいる。

昨年テネシーの田舎では近所同士三〜四軒合同で一ヶ月かけて家や庭にライトを取り付けた農家があった。十一月の終わりから毎晩イルミネーションが輝いた。そしてクリスマス週の週は毎晩、その住民がサンタさんの格好をしてそのイルミネーションを見に来る子どもたちにキャンディを配っていた。私はそんなおとぎの国のような光景を見る度に国中がイエス様のお誕生をお祝いしているようにうでなんだかウキウキしてしまう。

統計的にアメリカ人の八十六%がクリスマスといわれている。つまり十人いたらその内の八人がクリスマスチャンである。日本はどうだろうか。国民の1%に満たないと言われている。つまり、一〇〇人いてもその中にクリスマスチャン一人を捜すのが大変ということだ。アメリカで買い物する度にいつも思うのだが、小銭一つ一つに「In God we trust」(神様を私たちは信じます)と書いてある。国民が使うお金一つ一



つにそれが刻まれているということ。やはり国として神様を信じているのだ。クリスマスはその神様の御子イエス様がお生まれになったことへの感謝と喜びでいっぱい、贈り物を与え合ったり家々でイルミネーションの光を与えあつたりと、国中でお祭りのような騒ぎになる。

今年のクリスマスは日本で迎える。リースを作ってツリーを飾って、とクリスマスの四週間前に子どもたちと家をクリスマス色にするのがバリー家の年末行事だ。そしてクリスマスイブにはサンタクロースにクッキーとミルクとお手紙を食卓に用意して子どもたちは眠りにつく。

「サンタさん、今年も来てくれてありがとう。つかれたでしょう。クッキーとミルクをどうぞ。来年もまた来てね。」

今年も子どもたちが用意するクッキーとミルクがサンタさんを元気づけることまちがいなしである。

エッセイ

買い物あっちこっち

自動販売機

私は自動販売機でジュースを買った。冷たくておいしい。しかし、そこで少し引くか。私は本当に「買った」のだろうか。機械にお金を入れたら出てきただけなのだから「買った」のではなく「取った」のではなからうか。しかし、この一缶のジュースが私の手に届くまでのプロセスを想像すると「取った」では申し訳ない。どれだけ大勢の人の手がかかっているかわからない。しかし、機械は「ありがとうございました」とは言わないし、私も飲み終わっても「ごちそうさまでした」とは言わない。それに、自動販売機は、このジュースについて一言も説明してくれない。その代わりに、カンの上やまわりに、二百四十字ほどの説明などが印刷されている。そんなわけで、実際には買っているのに「買った」という実感が無いのかも知れない。つまりそこには、売り手と買い手との会話や心のやりとりがないのである。

スーパーマーケット

私は、家内から小さいカードを渡

されて、スーパーマーケットに出かける。カードには、マヨネーズ、大根、メザシ等と少し大きめな文字のメモがある。これなら、老眼用の眼鏡なしでも読める。私は、このカードに指示された通り忠実に買っていく。買い物カゴに、たくさん品物の中から、自分で選び取って「レジの所でお金を払う。レジのお嬢さんは「いらっしやいませ」「ありがとうございますました。」と言ってくれる。「はいどうも。」と私が答えたとしても、そこには大した会話は存在しない。そんなヒマはないのである。

めがね店で

家内のめがねが故障した。私も家内も、めがねをかけたまま、寝ながら本を読むクセがある。そこで、眠ってしまった時にフレームがねじれて折れてしまった。「眠る時にはめがねを外した方がよいね。」等と言いつつも、その習慣は続いている。したがって、生活必需品でもあるめがねが時々故障するという訳だ。行きつけのめがね屋さんへ行った。「いらっしやいませ、めがね、どうかなさいましたか?。」と奥さんが迎

えてくれた。「実は夕べ...。」と一応事情を説明する。「ちよつとお待ち下さい。今日はね、玉露の良いお茶がありますからお入れしましょう。」などと、奥さんがお茶を出してくれている間に、御主人が家内のめがねを調べた。「何日か預けていただけば部品を取り寄せて修理できますよ。」と言ってくれたのだが、すぐにでも必要なので、フレームを取り替えてもらうことにした。そして、御主人や奥さんとフレームについてあれこれ相談し品物を決めた。御主人が仕事をしている間、熱いお茶をいただくながら、私たちは雑談をして、仕上がり待っていた。

そこへ、若い二人連れがやってきた。何となく通りすがりらしく、仏頂づらをした男女である。「これ、すぐ直るかなあ。」と男の子が言った。「あ、すぐ直ると思いますよ、どうぞお掛けになってお待ち下さいね。」奥さんはめがねを受け取り、奥の機械室にいる御主人の所へ持つて行った。若い二人は無言で、入口の近くに立っていた。

私には、この二人の表情や態度が、

彫刻家 中島 陸雄

まるで自動修理機の前で、ガチャンとめがねが出てくるのを待っている人の様に思えてならなかった。こういうお店は、自動修理機ではないのに、と思った。人間が人間と向かい合っている場所なんだ、とも思った。しばらくして奥さんは、薬品をつけたらしい布で、丁寧にめがねを磨きながらもどってきた。「はい、直りました。また具合の悪い所があったらいつでもお持ち下さい。」男の子は、ポケットに手突っ込んで、お金を探る仕草をしながら「いくら?」と聞いた。奥さんは笑いながら「あ、お金よろしいですよ。」と言った。二人は一瞬びくりとした顔であった。そして、急に明るい表情をした。さっきまでの仏頂づらはすっかり消えて、実に礼儀正しい、素直な青年達に変わった。「ありがとうございます。」二人は代わるがわるでいねいにお辞儀をして店を出て行った。二人のその表情は「ラッキー、得しちゃった。」という表情ではない。心からの「ありがとうございました」という感謝の気持ちがありありと表れていたのである。

プロシズム

子どもたちの季節 仙道家

クリスマスの祝福を分かち合いた
いと願います。

日々の生活の中で、部屋の明かり
がつけっぱなしだったり、ゴミ箱の
側にゴミが落ちていたり、ものが出
しっぱなしだったり、そんなことで
イライラ、ブンブンすることもあり
ます。

「もー、明かりつけっ放しだよ！」
「使ったものはしまっ！」

と大声で言っていることもあります。
そんなとき、いつもふと思いつく
ことがあります。

私は小学校のPTAの役員をさせ
てもらっています。

ある日、数人の役員と講演会に行
きました。その車中でいろいろな話
をしました。

「いつかうちの子が『お母さん、
トイレが汚れてる。何でそのままに
するんだろ』って言ってきたの。だ
から言ったのよ。『汚した人が気が
ついてきれいに出来たらよかったけ
ど、でもね、他のこと考えてたり、

忘れちゃったりすることもあるんだ
よ。だから、気がついた人がやって
あげたらいいよね』って」という話
をした方がいて、私も、なるほどと
思いました。その方が家族が思いや
りを持って生活できるように、と色々
なことをしているのをお聞きし、ま
たまたなるほど、と思いました。

では、私は？と振り返ってみると、
ウーンと唸ってしまいます。
ちょっとしたことでも見過ごさず、
気づき、行動が出来るような子ども
たちになって欲しいと願いつつ、ま
ず、私が気づいたら行動できるよう
にしないで、と思います。そのた
めに、まわりを見る眼を十個と高感
度の心がほしいのです。

下さい、サンタさん！。池田祐子

暮らしの彩り 笹山家

「笹山家」は、集合住宅街の中の
一軒である。軒を並べる暮らしをし
ていて、最近支関先の重要さを知っ
た。枝の伸び放題となった我が家の
道路に面した植木は、コミュニテイ

人との関係の中で育ち合うこと、
それが私たちが、一緒にいる意味で
あることを子どもから教えてもらっ
ている。「ひとり」が加わることで
豊かなことである、その大切さを、
今、あらためて思う。 竹花 信恵

光の中で 佐藤家

赤くて丸いキューピーの様な「ほっ
ぺ」。怒ったときのとても意地っ張
りな背中。そして、抱っこされたと
き「おテテはここの？」といった
くすぐったいような声と笑顔。
萌季ちゃんは、私がこの仕事に就
いて初めて出会った子どもです。印
象は、ひととき新鮮やかです。彼女に
は迷惑だっただけですが、やはり
私の思い入れも激しく、窮屈な思い
をたくさんさせてしまったのではな
いかと思います。

彼女は今、進路を考えなければい
けない大切な時期にさしかかってい
ます。そんなプレッシャーもあるの
か、

「学校、休んでもいい？」

と尋ねてくることも少なくありませ
ん。

「いいよ。」と即答しますが、結局、
彼女は休みません。「いいよ」と言
われることで満足するのも知れま

を汚している。きちんと整っている
他の家のものとは大違い。

一念発起して、自前で剪定をする
ことにした。本家より大小二つの剪
定鋏を借りた。

休日の子どもたちは居間でTVを
見たりしながらヒマを持って余して
いる。そんな珠美が剪定をかって出た。

大きな鋏は重量がある。植木は珠
美の身長よりも大きめだ。ちょっと
した労働になるだろう。

「ジャキ、ジャキ」と、リズムカ
ルな鋏遣いの音がしている。歯のガ
タガタになった鋏の先を上手に使っ
て、植木が徐々に整いだした。

近所の方が、植木が整っていくの
を見て、また中学生の女の子がそれ
をしているのを見てほめながら通っ
ていく。そんなことお構いなしで鋏
を進めていく珠美である。

「チヨキチヨキ」という小さな音
も聞こえた。年中さんの美季が
いつの間にか小さな鋏を手に、植木
を切っている。こちらもなかなか上
手な鋏さばき、といっても目が離せ
ない。

せんし、心の中の葛藤の結果なのか
も知れません。あるいは、「いいよ
」の裏のメッセージを受け取るのか
も知れません。

―無言のプレッシャー。

「彼女らしく」と願っていたのに、
私の関わりは、自らの価値観でがん
じがらめにして、「彼女らしさ」を矯
めてきてしまったのではないか…。
傲慢な考えかも知れませんが、幼い
頃から関わり続けるといふことの恐
ろしさを思わせられます。

遠くないいつか、彼女は、誰から
も指図されることなく行動しなけれ
ばならなくなり、自分の価値観を作
る自分探しに取り組み日が来るでし
ょう。次の扉を開く、新たな誕生日
です。その日をよりよく迎えられる
よう、そこへつながる「今」を共に
つくっていききたい。心からそう願っ
ています。

祝、クリスマス。皆さまのよりよ
い「誕生日」を祈りつつ…。

岩崎 まり子

河のほとり 倉沢家

亜紀も中学二年になり、そろそろ
具体的な進路について考えなければ
ならない時期が来た。先日学校で行っ
た適性テストでは、自然が相手の農

一時間半から二時間ぐらいそうし
ていたのだろうか。五時も回って辺
りは薄暗くなっても、二人は鋏を動
かしている。けれどもさすがに暗く
なったので一旦引き上げてきた二人
だったが、やっぱり全部終わらせ
ないと、珠美は再び鋏を持って「植木
職人」しに出ていった。

翌朝、外に出て植木を眺める。綺
麗に整った植木が朝日に堂々として
いる。

こういうひとつひとつを経験しな
がら「家」の暮らしを少しでも多く
楽しんでほしい。地域での暮らしを
感じてほしい。

手探りの暮らしが、また続いてい
く。

原田家日記 笹山 恵理

「焼きいも、焼いていい？」「ま
だ早いよ。ケヤキの木に、まだ葉っ
ぱがたくさんついていてでしょ」と
言っているうちに、あつという間に
裸木となる目前。園庭が落ち葉で埋
まっている。柿の実を皮ごと丸かじ

以前亜紀に「亜紀ちゃん、倉ちゃ
んが年を取って動けなくなったら倉
ちゃんのめんどう見てね。」と冗談
を言ったことがある。

先日、菅原先生が同じ様なことを
沙恵に言うと、「エー、亜紀ちゃん
の方がいいんじゃない。」と、答え
ていた。それを聞いていた亜紀は間
髪入れずに、「だめだよ、私は倉ちゃ
んのめんどうを見るんだから！」
ずいぶん前に私が言ったことを真
に受けて本気で私のめんどうを見て
くれるつもりになっていた様子。そ
の時の亜紀の真剣な表情がおかし
いやら嬉しいやら…。

私へのそんな気持ちが溢れている
ような亜紀がとてもとおしく思え
た。

自分のことは後回しにして、いつ
でも他人のことを気遣うことの出来
る亜紀には福祉関係の仕事は天職に
なれるかも知れない。

福祉に関わってずいぶん長くなっ
た私だが、亜紀のそんな人との関わ
りを見習わなければならぬと、強
く思っている。

倉沢 智子

りの季節と入れかわって、落ち葉で
の焼きいもづくりに余念がない。福
子が季節の味を真っ先にとらえるの
は幼い頃からの習慣のようだ。早春
の「のびる」等の収穫物を手に下校
した小学校生活も残すところ後半。
一歳十ヶ月の時に出会って以来、ずっ
と私の担当グループの末っ子だった。
二歳の千佳がグループに加わり、
位置が変わった。「私のこともた
さんダッコした？」「私、どんな言
葉しゃべった？」と、十年前の自分
を確かめるような日々が続く。私の
全てを千佳に使うような日々と、た
くさん手伝ってもらい、たくさん助
けてもらう日々は重なっていつてし
まった。

どれだけがまんさせているか、ど
れだけ疲れているのか、無理させて
しまっているのではないのか、そし
て何より、ここが見えなくなっ
てしまっていくのではないだろうか…。
そんな気持ちで、自分につきま
とってくる。「ひとり」を受け入れ担
当者になっていく、その過程は、何年
経っても慣れることはない。その
むずかしさは、その子のみならず、
自分が関わっている子どもたちとの
関係が試され、揺れ動き、再び結び
なおしていく、自分自身の不安定さ
とのたたかいかいと感じている。

7

現場から

光の子たちと ④

藤本 曜子

第二土曜日、部活などがなく家に残った子どもたちはのんびりと一日を過ごします。その日の午後、仙道家は中学生と高校生の黄色い声に包まれていました。

朝、紅子に「原田家ってビデオあったっけ？」と聞かれ、「穴水さんがあるみたいだよ」という会話を交わしたのを思い出しました。紅子は午後になるとさっそく原田家の穴水さんにビデオデッキを借りてきたようです。そして、前におじいちゃんとお買い物に行ったときからあたためておいた「GLAY」のビデオの鑑賞会が始まったのです。

お隣の萌季ちゃんと紅子と私とで話して必ず話題になるのが、今彼女たちが夢中になっている「GLAY」。この二人に「GLAY」のことを語らせたらとまりません。私も彼女たちの持っている音楽雑誌をめくりながら、一生懸命話題についていこうと努力しているのです。高校生の頃は普通に生活し、友達と話をすれば、手に耳に入ってきた情報も、今の私には努力なくして入らないのです。キヤキヤと騒ぐ

彼女たちにおもしろがって、メンバーの悪口を小姑のように言ってみたりもします。「この化粧濃くて素顔がわかんないよね」とか「何でこの人は、このメンバーなの？」とか。時々ほめたつもりで、「ジローくんてほっぺのあたりがふっくらしてかわいいね」。でも、彼女たちにはほめ言葉には聞こえないらしく、「よーこさんてさあ、さり気なく人のことけなすよね」と。ほめたつもりなのに……

ジローくんが笑ったのだ、てるさんかっこいいの言って喜んでいる彼女たちを見てると、私はついニヤニヤと横目で見てしまいます。ジローくんのアップが映ったとき、紅子は「もーこれがあれば、私は一週間幸せ」と言っけて踊り出しました。私はいつの間にかタクローの人のファンという事になっていたりします。そんな紅子に、「ねえ紅子ちゃん、ジローくん、すっごくかっこいいからさ、今日の晩ごはん一緒に作ろう」と言ったら、紅子は「手伝うよ、手伝うけどさ、このビデオが終わるまで待つて」と返事をしました。

くは、誇ることなど出来ない家庭で生まれ、生まれたことを誰からも喜ばれることも祝われることもなかったという出生の状況がある。それ故に家庭や家族に対する不本意さが心の奥底に凝縮しているのである。そのことが子どもたちの精神的成長に、想像を超えた巨大なマイナスの質量をもたらしているのである。たとえば、高校を中退した庄一が、たくさんのご迷惑をお掛けしながらも受け入れていただいていた職場を退職してまで「お父さんの所に行きたい」と言い、父と働き出して三日で逃げ帰ったことや、高校を卒業して大手自動車メーカーに就職した陸男が一年数ヶ月で、おじいちゃん家で暮らしたいと退職してきたこと、果ては、高二の加津子は電車で隣り合ったおばさんから声をかけられたのがきっかけで、普通の家の子になりにたいと、その人の家に養女になることで行き、二ヶ月弱で不調でもどってきたことなど挙げればきりがないのである。

養護メモ 70

変わりゆく季節の中で

菅原 哲男

養護施設光の子どもの家は、科学万能への信仰に基づく利便と快適、物質的豊かさの追求に狂奔したこの国で、生活の基本的な単位である家庭や家族の内奥にまでその尺度以外探すことが出来ないものに変質させられて、そのしわ寄せを負ってしまった最も力のない子どもたちを、大いなるものからの授かりものとして尊び、慈しみ、かけがえのない者として暮らしあうために建てられた。

時の移ろいは素早く、為すべくして成し得なかった悔恨のみを積み重ねていくようである。流動し、多様化する現代社会の中で、一般に、どこでどのように生まれ育ったのかなどについて気になるようなことは多くないと思われるのだが、実は、そのことはその人の存在の基本的なアイデンティティに関わる重大なことなのである。

自分はこの誰の子として生まれ、父は何者で母は・・家族や祖先などそのルーツは、その人を特定する、あるいはその人のよって立つ重要な要因の一つであるのだ。ここにやって来る子どもたちの多

きつと紅子は「ジローくんかっこいいから」なんて言わなくても手伝ってくれたんだろうと思います。でも、何と私のあさましき、手伝ってもらおうとジローくんを引き合いにしてしまいました。

ビデオが終わると、一週間の幸せを手に入れた紅子は、すぐに手伝いに来てくれました。メニューは、かじまぐろの童田揚げと豆腐ステーキです。きのこを洗って切り、かじまぐろを切り、夕食の支度を始めます。その日少ししかお昼寝をしていなかった二歳の裕がぐずぐずして、私は、ずつと抱っこしていたのでとても助かります。調理の中村さんも様子を見に来てくれました。一生懸命料理をしている紅子の姿を見て、中村さんは、厨房から上等の牛ヒレ肉を持ってきて、みんなのために焼いてくれました。みんな、あまりのおいしさに無言でもくもくと食べていました。「みんなが手伝ってくれたからだよ」と中村さん。本当によく手伝ってくれました。その日の夕食の支度は、結局紅子と漢子で全部してくれました。

クリスマスを迎える。

光の子どもの家ではこのクリスマスの時期を丁寧に過ごすために工夫を凝らしてきている。

クリスマスまでのアドヴェントを待ちながら準備していく。ある者はクリスマスの出来事を讃美、聖書朗読、振り付けなどで表現する礼拝の一形態としてのページェントの練習を励み、ある者はアドヴェントのためのクッキーを焼き、またある者は部屋の装飾に工夫する。

クリスマスの中で、神の子が馬小屋の中で生まれたという事実は光の子どもの家の子どもたちに特別な意味を持つものだからである。畜生などという乱暴な侮蔑の言葉があるように、家畜は人と同一に並ぶものではないのである。古い東北の曲がり屋などを別にすれば、家畜のための小屋は、通常母屋から離されてある。近代化されたといえ、牛馬などの家畜小屋といえ、そこは、臭くて汚い場所であるのだ。どうしても人が暮らすようには出来ていない。もし、人が住んだとしたら嘲笑され侮蔑されること請け合いの場所なのである。

そんな中に神様の子が生まれたというのである。これは大変なことである。そして、私たちのクリスマス

夕食の時、中村さんにコツを教わって紅子が焼いた豆腐ステーキに、紅子で作ったきのこソースと詩美がおろしてくれた大根おろしをかけるのと、とてもおいしく、「さすが」と思いました。おかわりがないのが残念なほどでした。私にとって、とても幸せな夕食となりました。さて、この夕食のおいしさはどこから来たのでしょうか。「GLAY」からもらった一週間の幸せからか、それとも紅子の実力?!



のイメージは、そこは何か宮殿さえも及ばないメルヘン的な、あるいはファンタジーを感じさせるような場所へと変えられているのだ。何しろ東方の博士たちがそこで礼拝したという場所なのだから。

最も汚い嫌な場所が、人々の希望や文化を生成する美しい浄い場所となること出来るのである。

どんなに貧しく、劣悪な状況で生まれたとしても、家畜小屋で生まれるという人はそんなに多くはないだろうし、現代の日本の社会状況の中でそれはまずないと言ってよい。これは光の子どもの家の子どもたちにとって、この家が精神的支柱としてある神様の子どもよりはましな出生であり、生い立ちであることを確認できるからである。

イエスの生涯はまさに常識として疑うことさえしなかった知識や技術、習慣や価値観等すべてを根底からの変更を迫るのである。死刑という極刑の最もむごい方法の十字架が、人々の救済を完成させ、そのイメージを全く変えてしまうように。

私をはじめ、そうでなければ光の子どもの家の子どもたちもこの社会で生きていく希望も夢もつくり出す手がかりさえないのである。その希望の原点としてのクリスマス、心から祝いたい。

創立10周年記念

●光の子叢書

「水の上にパンを投げよ」

福島 勲 著

好評頒布中!! 頒価 2,000円

連絡先：光の子どもの家



光の子巻頭文に書下し「アブラハムに学ぶ」を加えキリスト者必見
 待望の書 A4変形上製本二四一頁
 クリスマスプレゼントに最適!!

日誌抄 = 暮らしの風景 =

1997年 8月1日 ▶ 9月30日

- 3日 東大宮教会教会学校夏期学校 幼稚園小学生8名が群馬県へ5日まで
- 11日 お盆帰省始まる 本当に少ない家族体験をほんの数日でもさせたいと願い 家族がいる可能性の高い時間帯を考えて走り回り家庭訪問したりして準備するのだが年齢が上がってくると帰省したところで何もおもしろいことはない それよりは光の子どもの家にいた方がいいと 帰らない子どもが増加 心の中までは見えないが 成長かそれとも家族への失望か
- 12日 帰省できない子どもたちをつれて、木部すなおお母が下田の実家へ担当の子ども3名を、8名の子どもを連れて ずいぶんいろいろな方々のご厚意であちらこちらにお世話になってきたが、この10年ほどの間変わらずお迎え下さる府川ご夫妻を初めとする湯河原町の黛執、戸部喜久雄、岩井卯吉などのご厚意で海水浴の2泊3日 感謝
- 15日 町内北平野の稲葉公子氏よりコーンの缶詰を
- 16日 元タカラクラブ会員の松永道代氏より、奈良早苗の誕生祝いを、10年を超えて
- 18日 加須市の梅沢三保氏より再生テッシュペーパーを
- 22日 舞鶴学園園長桑原教修氏来訪して見学と懇談
- 23日 菅原施設長秋田県羽後町で講演 川島守広プロ野球セントラル・リーグ会長と

- 25日 江森ヘヤーサロンが子どもたちの散髪ご奉仕
- 26日 東大宮教会中沢やす子氏より日用品、家具などを
- 29日 この40日の職員たちにとっては暑くて長い 子どもたちにはあつという間の夏休み たくさんの方々のお支えやご協力によって可能になった さまざまな体験経験 試みを美しい楽しい思い出にして 感謝しながら振り返り 夏休み気分を一掃し 新しい学期を迎え撃つためのさよなら夏休みパーティーを園庭で
- 1日 2学期始まる 幼稚園3名 小学生5名 中学生11名 高校生6名 自立訓練中1名 が元気に
- 2日 菅原施設長アメリカコロラド州児童福祉セミナーに出席のため出発
- 3日 島村梨園より梨をたくさん
- 24日 後援会役員会
- 25日 数年前にご他界された先代の御主人のご遺志を継続して毎月お出で下さる江森ヘヤーサロン 家族ぐるみで子どもたちの散髪ご奉仕 感謝
- 31日 大阪兄妹の兄が来春中学を卒業するにつき 父宅での引き取り高校進学は可能性を協議 離れて暮らすことで本当の父子関係が情緒的にも育ちにくい 父子喧嘩などを経験することの大切さなどを話し合う

こんな風に夏から秋を迎えました。励みます (くら)

反 射 光

☆夕焼の空に影絵のように佇んでいる子ども家から、クリスマスソングが流れてきます☆この年のたくさんの方々のお支えとお祈りに心から感謝申し上げます☆昨年末に起きた老人福祉施設のスキヤングルの影響がほとんど固定してしまった福祉施設のイメージになってしまいました☆これを変えるには自ら身を慎み、初め願った「本当の意味での子どものための子どもの施設運営」を確実に進めていく以外なさそうです☆児童福祉法が改正され収容保護から自立の援助とその理念も変更され大きく変わろうとしています、国や地方の財政事情も手伝ってか現場の意識は今ひとつ盛り上がりません☆それでも、施設と地域を隔てていた収容保護の壁は崩れ、この町の子どもの家として全ての子どもたちに最善の利益を図る拠点にならなければなりません☆子どもたちの顔がクリスマス色に輝いています☆いつまでもそんな顔でいられるように心と力を尽くします☆祈、祝福！ 乞う、更なるご支援を！ (哲)